

## WEDGE SPECIAL REPORT

研究者たちはいったい何に駆られたのか

# 子宮頸がんワクチン薬害研究班 崩れる根拠、暴かれた捏造

「子宮頸がんワクチンを打ったマウスだけ、大体1年くらいして脳の海馬という記憶の中枢に、  
脳を攻撃する異常な抗体ができた」。厚生省研究班が行ったこの発表が  
この問題を追う記者たちにワクチン薬害の存在を強く印象づけた。

文・村中璃子 Riko Muranaka

# 明

らかに脳に障害が起きている。ワクチンを打った後、こういう脳障害を訴えている患者の共通した客観的所見が提示できている」

3月16日夜に放送されたTBSのニュース23で、信州大学の池田修一副学長は、「国の研究班の代表 信州大学池田修一医学部長」のテロップつきでこう語った。根拠にしたのはマウスを用いた実験結果である。

「子宮頸がんワクチンを打ったマウスだけ、脳の海馬・記憶の中核に異常な抗体が沈着。海馬の機能を障害してそのうだ」(ニュース23)

しかし、3カ月に及ぶ取材で明らかになったのは、信じがたい捏造行為の存在だった。池田教授のコメントを正しく修正すると次のようになる。

「子宮頸がんワクチンを打ったマウスの脳にワクチンによる異常が発生したという科学的事実はなく、そもそも、このマウス実験はワクチン接種後に症状を訴えている患者とは何ら結びつけることができない実験だった」

厚生労働省は、国費を使って、池田修一・信州大学脳神経内科教授を班長

とする通称「池田班」と、牛田享宏・愛知医科大学医学部学際痛みセンター教授を班長とする通称「牛田班」に、子宮頸がん(HPV)ワクチンの副反応を研究させてきた。両班合同の成果発表会がメディアに公開される形で開催された日の夜に、TBSがぶつけたのが池田教授インタビューだった。

池田班の発表は3つのポイントからなる。まず、患者の症状から、ワクチンが脳障害を引き起こしている疑いがあること。次に、その原因は、自分を攻撃する異常な免疫である自己抗体にあり、関連する遺伝子が存在すること。そして、脳障害が、マウスを使った基礎実験でも確認されたということである。副反応メカニズム証明の入り口に立ったと言わんばかりの発表に、メディアは色めきたった。

成果発表会からわずか2週間後の3月30日、子宮頸がんワクチン被害者連絡会は記者会見を行い、国と製薬企業2社を相手取って集団提訴を行う予定であることを発表した。

## 医学部長が

遺伝子頻度を理解せず

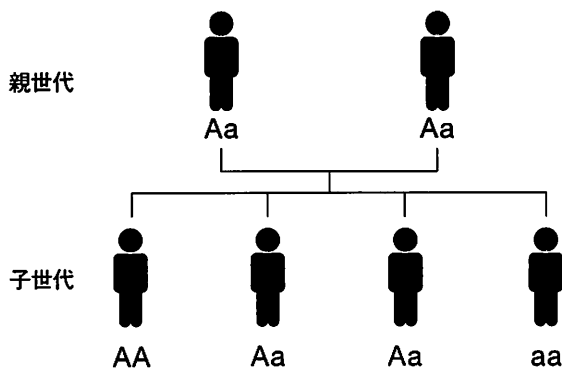
まず崩れたのが「遺伝子」だった。

池田教授は、子宮頸がんワクチンによる脳障害を訴えている患者の約8割がDPBI\*05:01という免疫に関わる遺伝子を持っており、日本人の平均頻度約4割の倍以上だ、と発表した。

しかし、筆者は、京都大学大学院医学研究科附属ゲノム医学センターの松田文彦教授の協力を得て検証を行い、「保有率と遺伝子頻度の混同」(図参照)という基本的ミスによる誤りであることを指摘する記事を執筆した(参考記事:本誌ウェブ版Wedge Infinity)利用される日本の科学報道 前篇・中

保有率と遺伝子頻度(アレル頻度)は異なる

(出所) ウェッジ作成



保有率 (1個でもAを持つ人の割合): 子世代では3人/4人 = 75%

遺伝子頻度 (遺伝子Aが現れる頻度): 子世代では4個/8個 = 50%

篇」。

大学教授が、シヨウジョウバエやエンドウマメでお馴染みのメンデル遺伝の基礎を知らないはずがない。このミスリードに対する問い合わせが相次いだ厚労省は4月20日、池田班の発表に問題があったことを認める異例の文書を発表するに至った。

マウス実験についても、専門家の間では疑義が上がっていた。当初から囁かれていた疑義は2つ。この特殊なマウスを使った理由と、実験デザインが明らかにされていない理由である。

動物実験を用いた研究に詳しい脳科学者、藤田保健衛生大学の宮川剛教授はこう言う。「池田班の実験で用いられているZ-<sup>エス・エフ・カウパー・ビルド</sup>欠損(ノックアウト)マウスは、何もしないで飼っているだけでも、加齢により海馬で自然に神経細胞死が生ずることが知られる特殊なマウス。ヒトの自己免疫疾患を研究するために、このマウスを使う妥当性は不明」。

「ワクチン接種後の血清(自己抗体)のマウス海馬への沈

着」と題した池田班の発表資料(左図)には、子宮頸がんワクチンだけが強く緑色に染まった1セットの画像が貼ってあるだけで、母集団の数やワクチン投与量といった基本情報がない。画像に添えられた自己抗体の検出量を示す棒グラフにも、統計解析につきもののエラーバーがない。

また、なぜサーバリックス(子宮頸がんワクチンの一つ)、インフルエンザワクチン、B型肝炎ワクチン、生理食塩水という4群を設定したのか、もう一つの子宮頸がんワクチン、ガーダシルのデータは示されなかったのかなど、疑問は尽きない。

### 責任をなすりつける研究班長 NII1で動じない実験担当者

3月16日の発表直後、筆者は池田教授に「実験で用いたマウスの数、ワクチンの投与量など、スタディのデザインや条件を詳しく教えてください」と問い合わせた。すると、池田教授は「マウスの実験は私ではなく、信州大学の他の研究者が発案して実施しておりま

す」と責任の所在を濁し、「詳細は研究のオリジナリティーと論文作成のためお話しすることはできません。電子顕微鏡写真等の個別データの解説は控えさせていただきます」と、一切の回答を避けた。

2月に開かれた合同班会議で池田教授は、「病態解析のためのモデルマウスの作成は産婦人科の塩沢丹里教授たちが行っています」と発言して、マウス実験を発案したとされる他の研究者に関する手がかりを残していた。塩沢丹里教授は、腫瘍を専門とする産婦人科医には珍しく「検診は勧めるがワクチンは勧めない医師」として知られ、池田班に名を連ねる唯一の産婦人科医でもある。実際に手を動かしたのは、信州大学産科婦人科学教室の誰なのか。周辺取材を重ね、それがこの4月に信州大の准教授から関東圏の新設大学の教授職に転出したA氏であることを突き止めた。

去る6月3日、再三再四の申し入れに対し、ようやく取材に応じたA氏は、耳を疑うような発言をした。

「他のワクチンを打ったマウスでも緑に染まりますよ」

A氏によれば、実験はごく初期段階の試験的なもの。通常なら10〜20匹は用意するノックアウトマウスを3〜5匹ずつ用いて、子宮頸がんワクチン(サ



池田修一教授「子宮頸がんワクチンを打ったマウスだけ、脳の海馬・記憶の中枢に異常な抗体が沈着。海馬の機能を障害しているようだ。明らかに脳に障害が起こっている。ワクチンを打った後、こういう脳障害を訴えている患者の共通した客観的所見が提示できている」(3月16日TBS・ニュース23)

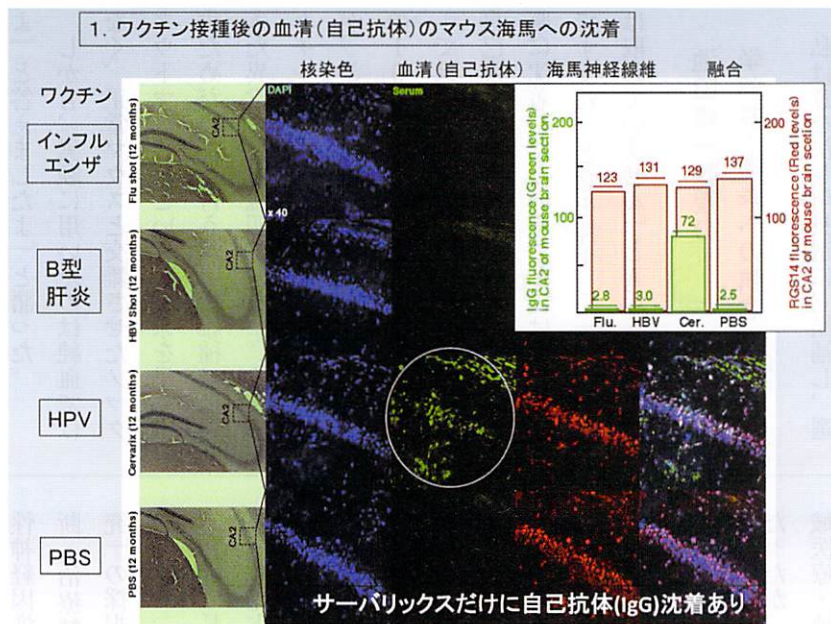
ーバリックス)、インフルエンザワクチン、B型肝炎ワクチン、生理食塩水をそれぞれ接種して観察した。手渡した資料には子宮頸がんワクチン以外のワクチンでも強く緑色に染まった画像が何枚もあった。しかし、池田教授は、子宮頸がんワクチンでよく光っている写真と他のワクチンで光っていない写真が組み合わさったスライドだけを発表したのでという。これは重大な捏造である。

「グラフは何匹のマウスについての解析データなのでしょう」と質問すると、

A氏は「1匹ですよ。この写真のマウスのものです」と答える。同席してくれた研究者も呆れて「つまり……写真もグラフもチャンピオンデータってことですか? NII1の」とこぼすと、A氏は「そうそう」と相槌を打った。

チャンピオンデータとは、仮説にとつて都合の良いデータのことで。科学に求められるのは、結果を代表する意味をもつデータであり、チャンピオンデータで議論を進めるのは紛れもない捏造である。チャンピオンデータとは、言ってみれば100人に1人しか成功しないダイエット法で減量に成功した一人のデータや写真のようなもので、そこには再現性も統計的意味もない。チャンピオンデータは、科学ではなく宣伝である。

「データが意図せざる文脈で出されたことに対して抗議しなかったんですか?」と尋ねると、「それはありませんね。自分は池田先生の研究を手伝っているだけ。僕の名前は研究費申請にも報告書にも入っていないですよ」と即答。「発表の2日後かな、池田先生から電話があつて『ちょっと申し訳ない



池田修一教授(研究班長)が、3月16日に開催された成果発表会で示した資料

命の中枢である脳だけは、血管との間に強固なバリア機構が存在している。脳の障害を疑うという子宮頸がんワクチン副反応問題でも、ワクチン薬剤が本当にBBBを越え、脳に何らかの影響を及ぼしているのが最大の争点となっていた。また、実験に使われるモデルマウスでも薬剤は簡単には脳に届かず、モデルマウスの脳で自己抗体を確認するのは難しい

ことが知られている。やっとながったアポ入れの電話で初めて話した時、A氏は「僕は自己抗体が脳に沈着したなんて言っていないよ」と、快活かつ唐突にしゃべり始めた。同じ言葉を繰り返すので気になったが、「事情は会ってお伺いします」と言っただけで電話を切った。

A氏によれば、なんと発表された写真は、ワクチンを打ったマウスの脳のものではない。実験では、ワクチン接種から2、4、12カ月後に、各ワクチンを接種したノックアウトマウスから血清(血液の液体成分)を採取。その血清を別の正常なマウスの脳切片にふりかけて撮った画像なのだという。もちろんこれではワクチン薬剤がBBBを越えるということにはならない。しかし、あの発表では、誰もが「子宮頸がんワクチンを打ったマウスでは12カ月経つと脳に異常が起きていた」と理解したはずだ。

なぜワクチンを打ったマウスの脳を直接見ないのかを尋ねた。すると「2カ月とか4カ月でマウスを殺しちゃうと、その先が見られなくなるでしょ。人間でも採血して同じように自己免疫の検査をやりますよね」という答えが返ってきた。しかし、相手は人間ではなくマウスである。生きた人間を解剖して確認できないようなことを確認するために行うのが動物実験だ。

では、2カ月や4カ月はともかく12カ月経ったところではワクチンを打ったマウスの脳は見えていないのだろうか。そこで今度は「12カ月の時点で子宮頸がんワクチンを含む、どのマウスにも異常が見つからなかったから、血清をふりかける実験をやったのではないですか?」と尋ねた。すると、「もちろん異常はありませんでしたよ。加齢だけで神経細胞死が起きるマウスなので、どのマウスにも異常が起きていました」と話をそらしたが、ワクチンを打ったマウスの脳も確認していたことは分かった。

では、なぜ正常マウスの脳切片はすべてのワクチンで緑色に光るのだろうか。A氏に説明を求めた。すると、「NEKとB60欠損マウスは何もしなくても自己抗体がでやすいマウス。池田先生にも『他のワクチンも同じように緑になっているのはなぜ?』と聞かれて、『いや、そもそもみんな自己抗体を持っているんだからどのワクチンを打ったマウスでも光っていいんです

ことになったんだけど、メディアの目に触れてしまって、先生に問い合わせが行くようなことがあるかもしれない」と謝られました」と語った。

ちなみにニュース23で、池田教授は、信州大学の研究室らしき場所で白衣を着て話をしている。東京での発表会の約5時間後に放送されたことと併せて考えると、メディアの目に触れたので

は、自ら事前の撮影に協力していたと考えるのが自然だ。

どのワクチンでも緑色に染まる理由

人間には血管脳関門(BBB)と呼ばれる、脳の神経細胞を有害な物質から守るための関所のような組織がある。血管は人間の体に様々な物質を運ぶ役目をするが、生

よ」と答えましたよ」と語った。

しかも、実験に用いたのは純血ではなく、正常マウスと交雑させたノックアウトマウスだという。結果を早く出すためだったと言うが、交雑種では起きた異常を何も説明できない。またワクチン投与量は50ミリットルらしいが、これは換算するとヒトへの投与量の100倍以上。一体何がしたいのか。「では、子宮頸がんワクチンでできた自己抗体がワクチンを打ったマウスの脳に沈着したということにはならないですよ」と念を押すと、「その証拠は取れていません」とA氏も認めた。

## 池田修一教授の

### 学部長・学長への執念

私は意を決し学長選に立候補し、選考委員による投票の結果、2票足りず敗れた訳です——昨年、池田教授が信州大学第三内科同窓会報に寄せた「学長選を戦って、そして副学長に就任して」の一文だ。1998年に教授就任、2011年には学部長選に挑戦するも落選し、地元飯田市に戻って開業するとの噂もあった池田教授。しかし、20年来の秘書である倉科美鈴氏の勧めで応募していた厚生労働科学研究「難治

性神経因性疼痛の基礎疾患の解明と診断・治療精度を向上させるための研究」の採択が決定すると、息を吹き返した。

12年、長野県の小川村に多い家族性アミロイドポリニューロパチーという難病の診断や治療を前進させ、病気への偏見解消に尽力した実績で信濃毎日新聞社から信毎賞を受賞すると、14年には学部長選に再出馬。念願の当選を果たした。池田教授が子宮頸がんワクチンによる自己免疫の話を始めたのもこの頃である。池田教授のあくなき上昇志向は、医学部長就任からわずか1年あまりの15年、学長選出馬という形で結晶する。残念なことに結果は落選だったが、10月からは「特命戦略（地域医療・地域貢献）」を冠した肩書で、副学長に就任している。

池田教授はメディア出演が好きで、最近の医局員への口癖は「アピールが足らん」だと聞く。「自分はマスコミにもアピールして金を取ってきている」「アピールが足らん、だから金が取れない」「何が何でもアピールしろ」。確かに、15年6月26日に公開された厚生省の行政効果報告にも「その他のインパクト」として、「TBSテレビ、

ニュース23にて子宮頸がんワクチン接種後の副反応に関し2回取り上げられた」とある。科学者が科学誌への掲載ではなく、メディアへの登場を実績として挙げるのはユニークだ。

実験について質問したある研究者から、A氏もこんな言葉をこぼしていたと聞いた。「池田先生はもつと上を狙っている人なんですよね、こういうのを活用して」。

池田教授がいいデータを出せと指示したのか。A氏が自らチャンピオンデータを出したのか——。A氏によれば、実験について池田教授に説明したのは昨年12月28日の1時間ほどの一度きりだ。A氏とは、池田教授への説明に使ったという、A氏の立場を証明することになるオリジナルのスライドを見せてもらった約束で別れた。しかし、「今日中に送ります」と言ったスライドは翌日になっても届かず、リマインドのメールを送っても返事がない。非通知でかけた電話にやっと出たが「確認して送るところです」と言ったり、連絡がつかなくなった。最終的には、編集部からの電話を「出す必要ない」とだけ言って一方的に切ったという。

A氏がマウス実験をデザインの段階

から相談し、月1度は進捗を報告していたという塩沢丹里教授は、全ての真実を知っているに違いなかった。そう考え、編集部がイエスカノーかで答える質問をメールしたが、「一種の脅迫だ」と返し、取り合わなかったようだ。

あるクローズドの発表会で、A氏が池田発表とよく似たスライドを見せながらプレゼンするのを見たという研究者からこんな言葉を聞いた。「うまくやれるもんだなあ。どうやったらあんなにうまく自己抗体を脳に浸透させられるんだろう」と不思議に思いました。N11とも、脳切片と血清の出所が別とも、他のワクチンでも染色されるとも言っていませんでした」。発表会があったのは、池田発表から約1カ月後の4月中旬のことだという。

それぞれの立場と動機から、捏造に手を染める研究者たち——これが国費を投じた薬害研究班の実態だ。子宮頸がん罹患リスクを負ったワクチン未接種の少女たちとワクチンに人生を奪われたと苦しむ少女たちの未来は、こんな大人たちの手に委ねられている。▼

むらなか・りこ 医師・ジャーナリスト。一橋大学社会学部・大学院卒。社会学修士。北海道大学医学部卒。WHO（世界保健機関）の新興・再興感染症対策チーム等を経て、京都大学大学院医学研究科非常勤講師も務める。